

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

小田原遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

— 益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書 —

小田原遺跡

2001年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成12年度に行った
益美地区県営中山間地域総合整備事業に伴う、小出原遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会		
調査員	匹見町教育委員会主任主事	山本 浩之	
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	栗田 美文	
遺物整理員		大賀 幸恵 大谷 真弓	
調査指導	島根県教育委員会文化財課		
事務局	匹見町教育委員会教育長	寺戸 等(平成12年9月30まで)	
		松本 隆敏(平成12年10月3日から)	
	匹見町教育委員会次長		
発掘作業員	栗田 定 栗田 勉 栗田 修 森脇 雅夫	大谷 良樹	
	斎藤 直行 岡本 三生 村上 強 平谷 吾郎		
	中間昭二郎 長谷川時子 益川 爰子		

3. 調査に際しては、島根県益田農林振興センターの池田技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課
に終始多くなご協力をいただいたとともに、また発掘現場においては、土地所有者をはじめ、地元
の方々に終始多大なご協力をいただいたことに対して、ここに感謝の意を表したい。

4. 今回の調査において、柱穴遺構—P、上坑状遺構—SK、その他不明な遺構—SXと略号している。
なお、現場あるいは編集に掲示した現地図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1/1000の
縮尺ものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員及び遺物整理員らの協力を得て、執筆・編集は
山本が行った。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(山本 浩之)	1
第1節 調査に至る経緯.....	1	
第2節 調査の経過.....	1	
第2章 調査地区的立地的環境	(山本 浩之)	2
第1節 地理的環境.....	2	
第2節 歴史的環境.....	3	
第3章 調査の概要	(山本 浩之)	5
第1節 はじめに.....	5	
第2節 調査区の設定.....	5	
第3節 堆積層序と遺物包含層.....	5	
1. 堆積層序.....	5	
2. 層序と遺物・構造.....	8	
第4節 遺構	10	
1. はじめに	10	
2. 遺構状況	10	
3. 結句	15	
第4章 出土遺物	(山本 浩之)	17
第1節 はじめに	17	
第2節 遺物の出土状況	17	
1. 出土遺物について	17	
2. 遺物の出土傾向	18	
第3節 実測遺物	18	
1. はじめに	18	
2. 実測遺物	19	
第4節 小結	20	

挿図・図表目次

第1図 位 置 図	1
第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	2
第3図 地形断面図	3
第4図 調査区配置図	6
第5図 土 層 図	7
第6図 第4・5層層界部遺構指示図	8
第7図 第5層中位部遺構指示図	9
第8図 第4・5層層界部遺構陥入状況図 (1)	11
第9図 第5層中位部遺構陥入状況図 (1)	12
第10図 タ (2)	12
第11図 第4・5層層界部遺構陥入状況図 (2)	13
第12図 第4・5層層界部遺構図	14
第13図 第5層中位部遺構図	15
第14図 土器類実測図	18
第15図 陶磁器類実測図	19
第16図 石器類実測図	20
第1表 遺構計測表	10
第2表 出上遺物集計表	17

図 版 目 次

図版 1

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1. 遺跡の遠望（北東から） | 2. 遺跡の近景（北東から） |
| 3. 発掘作業風景（B調査区） | 4. 層序堆積状況（B調査区の東壁） |
| 5. 層序堆積状況（A調査区の東壁） | 6. 層序堆積状況（B調査区の南壁） |

図版 2

- | | |
|--------------|--------------|
| 1. 繩文土器の出土状況 | 2. 繩文土器の出土状況 |
| 3. 繩文土器の出土状況 | 4. 士器片の出土状況 |
| 5. 刃片の出土状況 | 6. 炭化物の表出状況 |

図版 3

1. P02・SK04（4・5層層界部表出）・SK05（4・5層層界部表出）の遺構表出状況
2. SK05（4・5層層界部表出）の遺構表出状況
3. SK06（4・5層層界部表出）・SK07（4・5層層界部表出）の遺構表出状況
4. B調査区SX01の表出状況（西から）
5. SK04（5層中位部表出）・SK05（5層中位部表出）の遺構表出状況
6. SK07（5層中位部表出）の遺構表出状況

図版 4

1. SK05（4・5層層界部表出）の半截状況
2. SK07（4・5層層界部表出）の半截状況
3. SK09の半截状況（西から）
4. B調査区SX01の半截状況
5. P02・SK04（4・5層層界部表出）・SK05（4・5層層界部表出）の遺構完掘状況
6. SK05（4・5層層界部表出）の遺構完掘状況

図版 5

1. A-a調査区東辺域における4・5層層界部表出遺構の完掘状況
2. A-a調査区東半域における5層中位部表出遺構の完掘状況
3. A-b調査区東半域における5層中位部表出遺構の完掘状況
4. SK09の遺構完掘状況（北から）
5. B調査区SX01の完掘状況（北から）
6. A-b調査区の遺構完掘状況（西から）

図版 6

1. A-a調査区の遺構完掘状況（西から）
2. B調査区の遺構完掘状況（西から）
3. A-b調査区試掘坑における河床礫の表出状況
4. 北からみた調査区の完掘状況
5. 実測遺物

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字澄川イ151番地ほかに所在（第1・2図・図版1-1）するもので、平成11年12月から平成12年1月にかけての町内遺跡詳細分布調査において縄文遺物等が出土し、遺跡であることが確認されている場所であった。したがって平成12年度の益美地区・県営中山間地域総合整備事業に伴い、発掘調査を実施することになったのである。

発掘調査にかかる手続きは、まず事業主体者側である益田農林振興センターと平成12年5月12日付けで契約を締結し、同年7月19日付けで文化庁宛に発掘通知を提出したのであった。

第2節 調査の経過

現地調査は平成12年9月4日から実施したもので、緩やかな傾斜をもった水田という立地から、削平、擾乱を呈しているという状況であった。そこには部分的に包含層も捉えられて、33基の遺構が検出されたとともに、出土遺物においては少量であるものの、10点余りの縄文遺物、他に陶磁器類等を含む計104点が確認されたのである。

調査面積は98m²と狭小になったものであるが、これは少量の遺物・遺構の検出状況や先に行った分布調査時の結果等を考慮したうえで判断したことによるものであり、また比較的短期間で終了したのは、堆積の大部分を砂質土が占めていて掘削しやすかったからであった。

なお、現地調査は平成12年10月30日に無事終えたのであった。

(山本 浩之)



第1図 位 置 図

第2章 調査地区の立地的環境

第1節 地理的環境

本調査の行われた澄川地区は、町内に7つある大字のうちの1つをいい、それは匹見川の下流域にあたる南西側に位置する（第1図）。

その澄川地区は匹見村として合併編入される昭和30年以前、匹見下村に組する地区であり、現在は持三郎・二出原・長尾原・能登・土井原・谷口の6つの小字からなっている。このうち遺跡は、持三郎（もっさぶろう）に存在するもので（第2図・図版1-1）。そこは南西側の山地が舌状を成して派生しており、匹見川はその端部を比高差約5~10mを測って、大きく蛇行して北西流している。

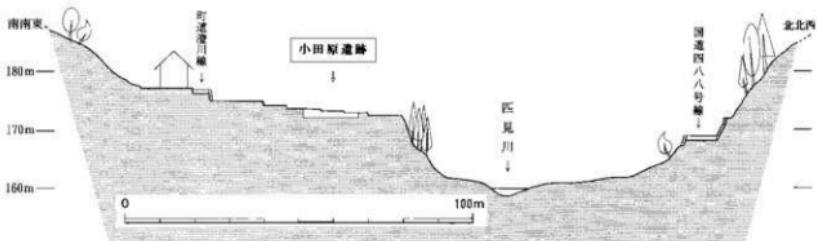
遺跡は、匹見川によって形成された東一西方向に延びる二字形を呈した河岸段丘のうちの、その舌状部にあたる下流域に位置しており、その現地標高は約170~176mを測っている。そしてそこは大半を水田地として括かれている場所であり、また山裾側を中心に10軒ばかりの民家が点在している環境にある（第3・4図・図版1-1）。



第2図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的環境

本地区における原始・古代遺跡は、顕著ではなかった。しかしながら、平成11年度から始められた



第3図 地形断面図

益美地区・県営中山間地域総合整備事業に伴い分布調査等を実施したところ、その存在が次第に認められるようになってきた。例えば、指呼範囲の舟戸遺跡では縄文時代前期のものが存在し、そして小泓遺跡では表面採取であるものの縄文時代後期のもの、また三出原の田屋ノ原遺跡では、縄文時代から弥生時代にかけてのものが分布し、それぞれ明らかにならなかったのであった〔註1〕。

ところで、この澄川地区における史料的な初見は、永和2年に成るという益田氏の基本台帳である「益田本郷御年貢并田敷目録帳」および「益田本郷田敷注文」に、本地区を示すと想定できる「墨河(澄川) 物三郎(持三郎)」を確認できることに初まるであろう。のことから南北朝において、既に益田氏によって奥十二島地域として、本地区がその支配下におかれていたと想定できるとともに、本地区には該当期には斎藤氏から分流したと考えられる澄川氏が居住していたことが確かであることから、益田氏は澄川氏に対して、この地区的管理を依頼したとする可能性を窺うことができると言えられる〔註2〕。

その中世における遺跡については、同地の上流部に山根ノ下遺跡の存在が確認されていて、そこは室町期における同地の支配者階級者の住居址と想定でき、青・白磁などの輸入陶器や、鐵剣・和鏡などの出土も確認されて、当時の様相を知るうえで貴重な遺跡も存在している〔註3〕。そして山城跡では、澄川氏が扱ったといわれる叶松城跡が上井原に、また向城としての役割を担ったと想定できる猿城跡が対岸に位置するといった歴史環境下にある。

これらの山城跡は、そのほかにも澄川氏が扱ったといわれる谷口の金山城にもみられて、いずれも山地が舌状に突き出しており、その山下には河川が周流するといった景観を呈するもので、本地区的地域性を示すものといえよう。なお、近世期における周知の遺跡では、同地区に慶長年間(1596-1615)から大正5年まで存在したと伝えられる長蓮寺跡がみられるほか、能登には丸渕鉢跡、そして火ノ口鉢跡などの製鉄遺跡も分布している状況である(第2図)。

また同地には、匹見川河畔のハツ表の岩頭に小祠があったといわれ、鎌倉期の大洪水によっておし流されて海上を漂った結果、その御神体は益田市久城町の櫛代賀姫神社境内に奉納されたとする伝承

がのこっている。そしてそこには対岸の山地から崩落した大岩もみられ、その際に7人の早乙女が落命したといわれるなど、興味深い民俗譚も伝えられている。

(山本 浩之)

〔註1〕『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書XII』(第30集) 匹見町教育委員会 2000年3月

『田原ノ原遺跡』(第36集) 匹見町教育委員会 2001年3月

〔註2〕井上寛司・岡崎三郎編集『史料集 益田甚見とその時代—益田家文書の語る中世の益田(1)—』

〔註3〕『山根ノ下遺跡』(第34集) 匹見町教育委員会 2001年3月

第3章 調査の概要

第1節 はじめに

調査対象とした地点は、匹見町大字澄川イ151ほかに所在し、そこは小田原といわれている場所で、その地名をもって遺跡名とした。前述のように、現地は三日月状を呈した河岸段丘のうちの、西端部にあたっており、匹見川との比高差は約10mを測っている。

そこは南側に山裾がせまり、北側に匹見川が接していて、その北一南方向の間隔は50~100mと狭く、大半は北東一西南方向に伸びた水田地と化している。そして山裾の南側は標高約176.5m、河岸端の北側は約170.8mを測って、比高差約5.7mの緩やかな傾斜地を呈している（第3・4図・図版1-1）。

第2節 調査区の設定

調査区は、先に行った分布調査において、調査対象地としたなかでも、西側および南側には遺跡の痕跡が顕著でなかったことや、反面東側には少量ではあるものの、縄文などの遺物が出土したことなどから考えて、任意に河端に近い東側に設定することにしたのであった。

その調査区は、調査順にしたがってみていくと、まず磁北方向に向かって8mのものを、東一西方向には7mの長方形を設定して、これをA調査区と称名し、さらに当区を二等分する50cmのベルトを東一西方向に設定して、南側区をA-a調査区、北側区をA-b調査区と小英字を付加して細分した。つぎに、A-a調査区の南辺から南方向に向かって6mの長方形を設定し、これをB調査区と称名するとともに、同様にして幅50cmのベルトを東一西方向に設定したのであった。したがって、調査面積は98m²を呈するものとなった（第4図）。

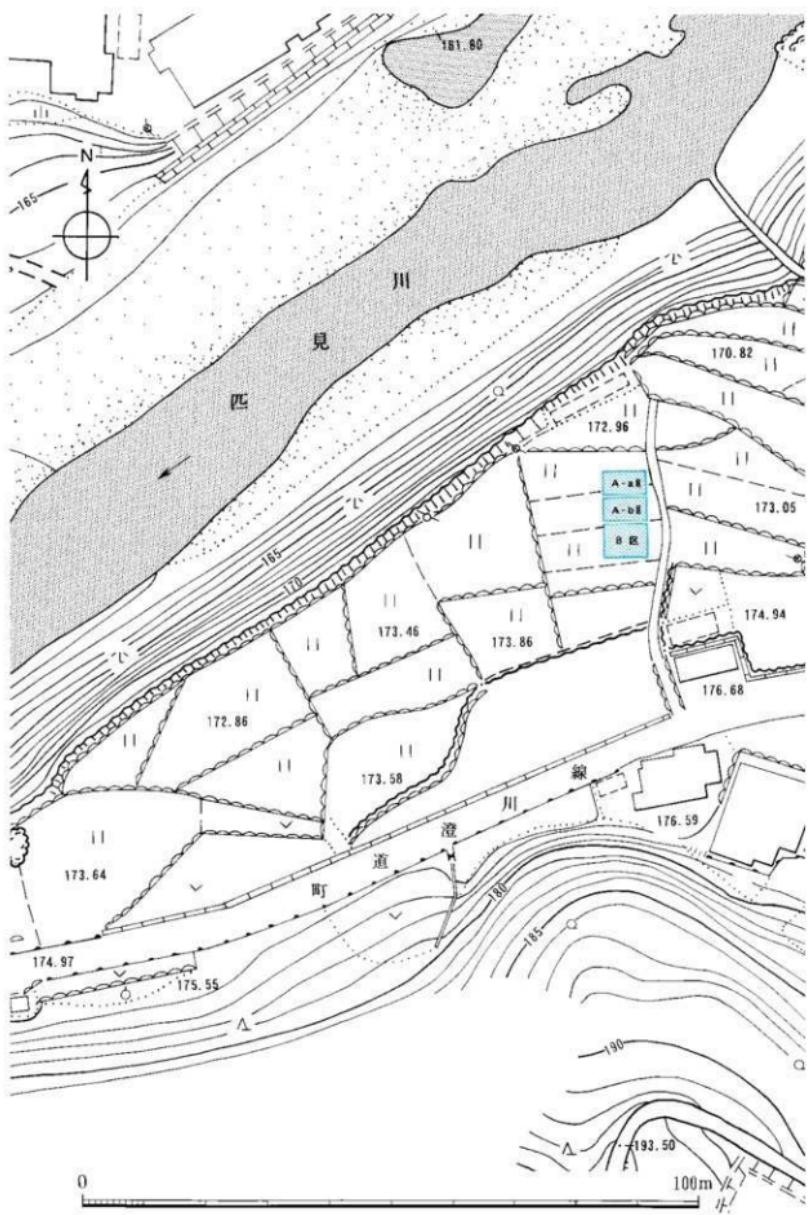
第3節 堆積層序と遺物包含層

1. 堆積層序

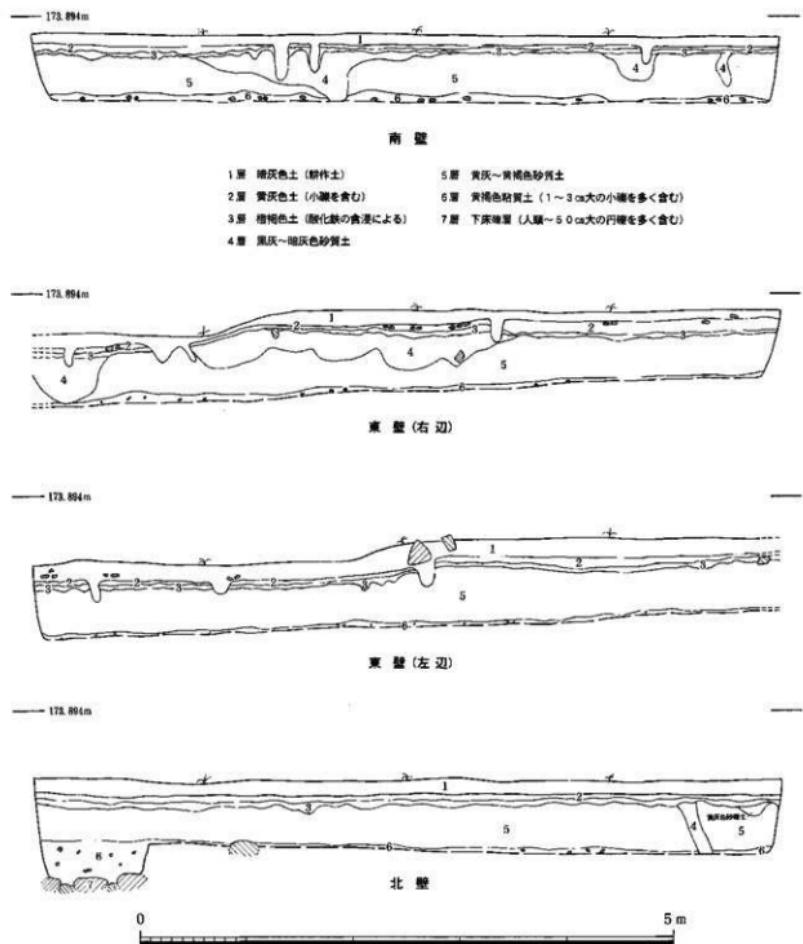
本遺跡の基本的層序は、まず1層の水田耕作上の暗灰色土、2層の客土（床土）とした小砾を含む黄灰色土、3層の酸化鉄が含浸した橙褐色土、4層の黒灰~暗灰色砂質土、5層の黄灰~黄褐色砂質土、6層の1~3cmの大いな小砾を多く含む黄褐色粘質土、7層の人頭~50cmの大いな円砾を多く含む河床砾層の順で堆積していた（第5図・図版1-4・-5・-6）。

このうち1層の耕作土は、5~20cmと堆積に厚薄差がみられるもので、それは凡そ南辺が薄く、その逆に北辺は厚いという傾向がみられた。2層の黄灰色土は、平均して5cm前後と薄く、概ね南辺から北辺にかけてやや薄くなる傾向がみられたものの、なかには南東辺において15cm程の層厚を部分的に確認できた。そして3層の橙褐色土は、尖滅部分から10~15cmに及んで波状的に酸化鉄分が含浸しているものの、土質的には下位層の4層として捉えられるものであった。

つぎの4層の層厚は、尖滅部分から厚いところで50cmを測り、それは南辺側は厚く堆積して、その



第4図 調査区配置図



第5図 土層図

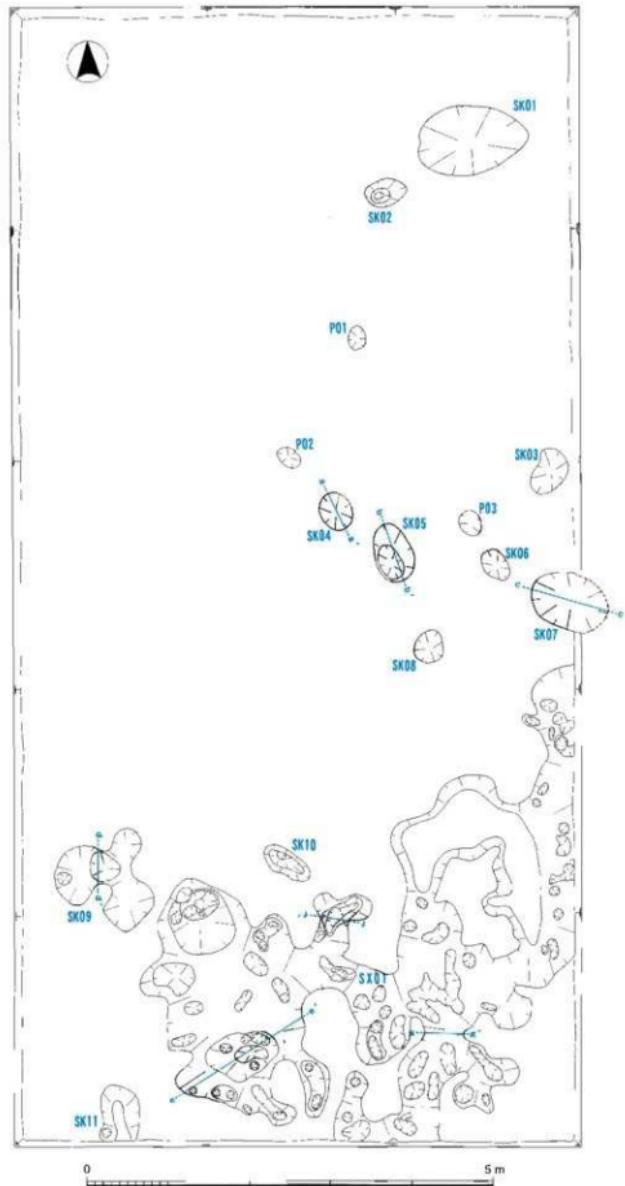
逆に北辺側にかけては、徐々に消失していく傾向がみられたのである。これは後世に水田造成などによって、北辺側にかけて削平されたものと考えられる。また本崩を色調から分層してはいないが、概して上位部は黒灰色、下位部に向かっては暗灰色を呈して漸次堆積していた。そして5層においても色調から分層してはいないが、概して上位部は黄灰色、下位部に向かっては黄褐色をおびる砂質土であった。つづく6層は、色調は黄褐色を呈しているものの、土質は粘質土に変わり、1~3cm大の小礫を多く含むものとなっていた。また河床砾層とした7層は、人頭~50cm大の河原石を多く含んだも

のであり、北辺端の一部を試掘するにとどめた（第10・11図・図版6-3・4）。

2. 層序と遺物・構造

遺物は、1～5層にかけて総ての層序に出土（第2表出土上遺物集計表）している。ただし、1層の水田耕作土から2層の床土（客土）にかけて出土したものは、後世の人为層といえるものであることから、それらは他層から搬入したものと捉えられる。

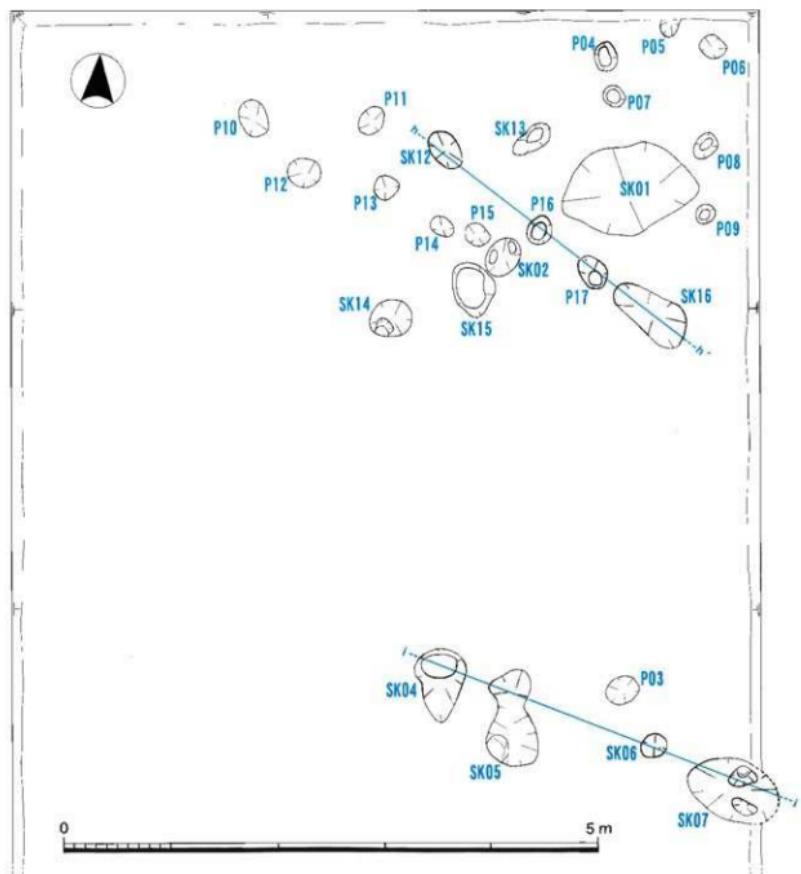
このうち最も多く出土したのは、1層の水田耕作土・2層の床土からで、陶磁器類を中心とした近世以降の遺物が出土し、ついで黒灰～暗灰色砂質土の4層（共伴遺物）とその下層にあたる5層の黄灰～黄褐色砂質土からは、繩文期を中心としたものなどが出土したのであった（第2表）。なお、上述のように1層出



第6図 第4・5層層界部遺構指示図

土分においては、他層からの搬入とも考えられることから、本稿においては、4・5層からの出土遺物を中心記述していくことにする。

その両層からの出土分布状況をみていくと、まず南辺側のB区においては、4層から数点の遺物が検出されたとともに、北側に向かって中ほどに位置するA-a区においては、4層および5層中位部から約10点が検出され、そして北辺側となるA-b区においては1点のみの検出が認められた。このことからB区からA-b区にかけて、つまり北辺側に向かっては深度の削平が行われたものと捉えられるとともに、おそらくオーバーフロー等で下層にあたる5層まで遺物が及んだものと考えられるところから、縄文遺物等は4層を中心として包含されているものと想定できる。



第7図 第5層中位部遺構指示図

なお遺構は、4層と5層との層部および5層の中位部に検出されたもので、少量の共伴遺物などから縄文文化の介在が認められた。また遺構実測においては、なかには坑壁の色調差はあるものの微妙で判り難く、または砂質土の流れ込み等の理由などから、明確な根拠を捉えることができずに層位ごとの実測に認証もあったとされる。

第4節 遺構

1. はじめに

遺構と捉えられるものは33基が検出（第1表遺構計測表）され、これらを形状から2つのタイプに種別し、つまりピット状のものをP、また上坑状のものをSKと略号したので、人為的かどうか不明なものについては、SXとしたものである（第6・7図・第1表）。

このうちSKは16基、PIは17基を検出したもので、これらについては、形態状からみたものではなく、凡そ径が30cm以下のものをP、それ以上のものをSKとすることにしたまでのことである。

これらの遺構は、ほとんどが4層と5層との境界部および5層中位部に検出されたもので、それ以外の層位では捉えることができず、なかでも中位部表出分については、掘削中にはその部位に文化構築面を確認できないものであった。したがって、その上位部に文化構築されたものと捉えられることから、実測の誤認であったと考えられる。なお、共伴遺物は少量であった。

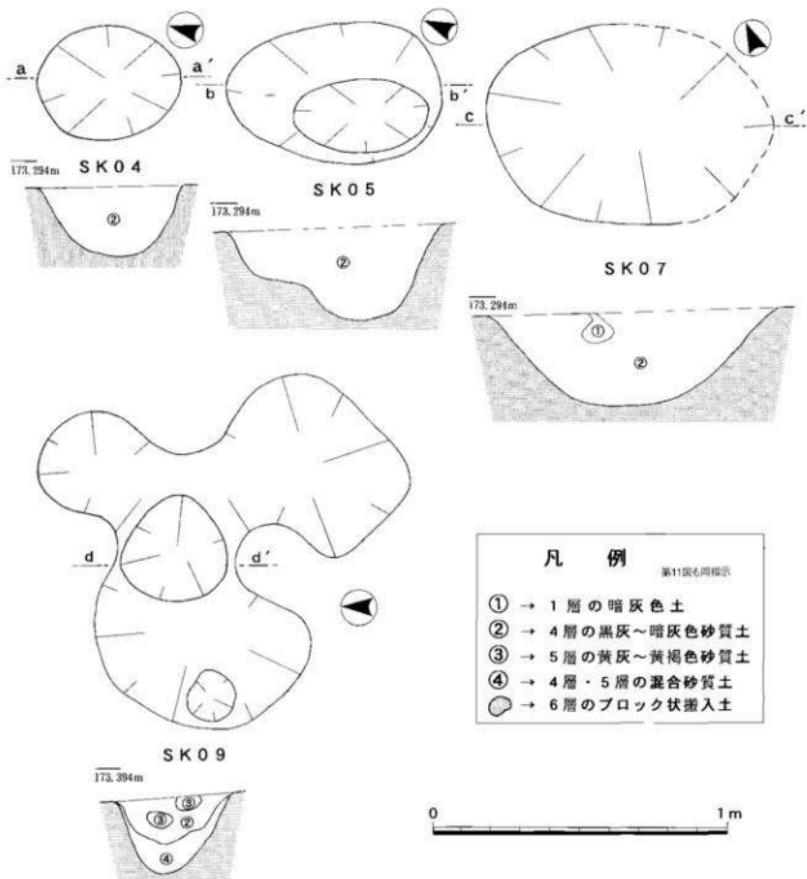
2. 遺構狀況

遺構の断面坑形は、A区においては半円状および台形状を呈するものが多く、B区は一部のSKを除いて、変形状を呈し、そして深度のものが多かった。また、それらの坑界部も砂質土に陥入されたものであったため不明瞭であり、そのために実測上の誤認もあったかと思われる。なかでもP03・SK01・02・04・05・06・07は4・5層層界部・5層中位部ともに実測を行ったものだが、垂直分布内では重複するものと捉えられた。そしてこれらの遺構の立ち上がり部分が明確に捉えることができないことから、おそらく大半はその坑底部分であろうと考えられ、したがって原形をとどめているものではないと思われる。以下、そのうち数基の遺構について検出状況をみていくことにする。

SK04 4・5層層界部表出(第8図) 調査区の中央部に検出された椭円形の土坑(第6・12図、図版3-1・4-5)。短径約38cm、長径は約48cmを測るもので、その土坑内には4枚の黒灰色砂質土が嵌入し、少量の炭化物が検出された。なお共伴遺物として縄文土器が1点確認されたもの、本遺構の機能的位置付けはできなかった。

SK05 4・5層境界部表出（第8図） SK04 4・5層境界部表出に隣接して検出された楕円形の土坑で、直径約44cm、長径約72cmを測り、その坑内には4層の褐色灰砂質土が嵌入するとともに、

第1表 遺構計測表

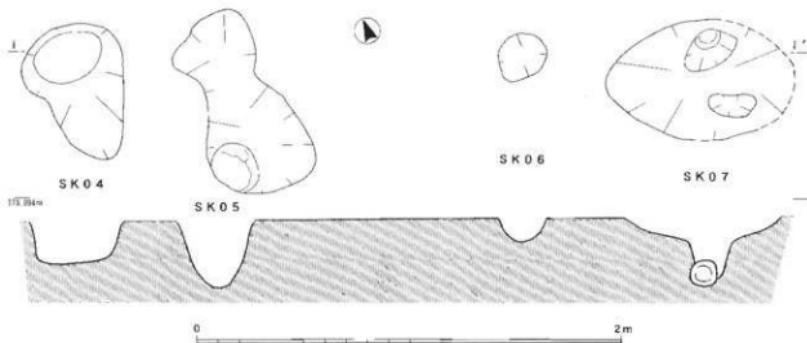


第8図 第4・5層層界部遺構陥入状況図(1)

部分的に炭化物および焼土が少量確認された(第6・12図・図版3-1・-2・4-1・-5・-6)。このことから、そこで火が用いられたものと想像できるものの、機能的な位置付けはできなかった。

なお、共伴遺物として表出面上に縄文土器1点が検出されている(図版2-3)。

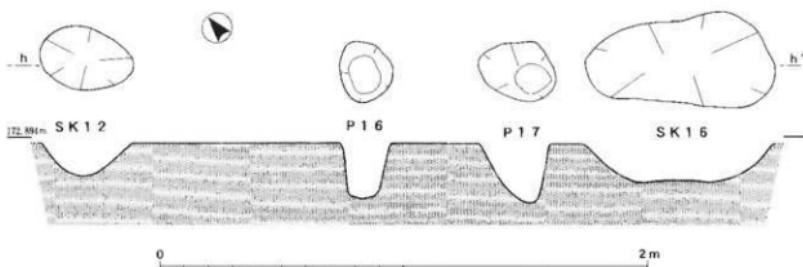
SK07 4・5層層界部表出(第8図) 調査区の中央部の東辺に検出された楕円形の土坑(第6・12図・図版3-3・4-2・5-1)。短径68cm、長径凡そ92cmを測るもので、坑内には4層の黒灰色砂質土が嵌入していた。部分的に炭化物や焼土が捉えられて、また一部には、ブロック状に耕作土と思われる暗灰色土の混入がみられた。これも火の使用を想像できるものの、機能的な位置付けはできずに、また共伴遺物も認められなかった。



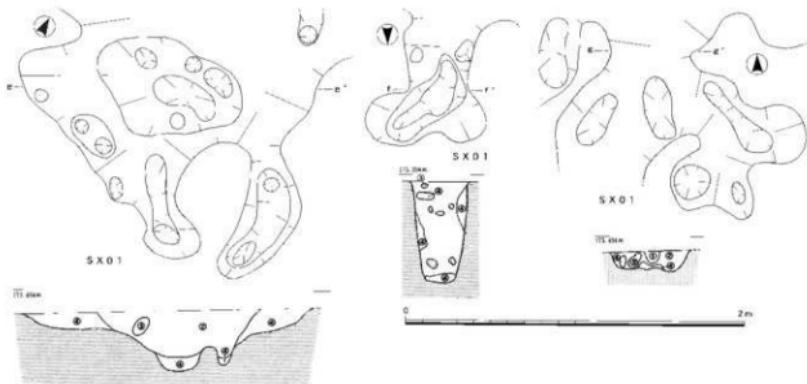
第9図 第5層中位部遺構陥入状況図(1)

SK04~07 各5層中位部表出（第7・9・13図・図版3-5・-6・5-2・6-1）これらは、いずれもSK04~07各4・5層界面部表出の下位（坑底）部分と想定できるもので、前述で触れたおりに、坑縁の色調の差が判り難く、また5層の黄灰～黄褐色砂質土の流れ込み等（図版3-5）の攪乱によって、4・5層界面部および5層中位部表出分とに分断して検出したものであった。その断面坑形は、SK05~07の各5層中位部表出は深鉢形で、SK04は台形を呈していて、いずれも4層の暗灰色砂質土の陥入がみられるとともに、部分的に炭化物が少量確認できたものであった。その大半は坑底部に6層の黄褐色粘質土が検出されたとともに、またSK04中位部表出においては共伴遺物として剥片が検出されている。したがって、これらの遺構構築面は4層の黒灰～暗灰色砂質土から始まっていると考えられたものの、機能的な位置付けはできないものであった。

SK09（第8図） 調査区の南辺側の西端部に検出された不整形の十坑（第6・12・図版3-4・4-3・5-4・6-2）で、短径約32cm、長径約126cmを測るもの。表出面と最坑底部との差は約33cmを測って、その坑内には4層にあたる黒灰色砂質土の陥入が確認されるとともに、坑底部には4・5層の混合土を捉えることができた。またブロック状に5層の黄灰～黄褐色砂質土が嵌入していて、部分的に炭化物を少量捉えることができた。



第10図 第5層中位部遺構陥入状況図(2)



第11図 第4・5層層界部造構陥入状況(2)

SK12・16（第10図） 本坑は調査区の北辺部に検出された土坑で、表出面は5層黄灰～黄褐色砂質土の中位部であった（第7・13図・図版5-3・-6）。その断面坑形は、いずれも弓状を呈して弛緩であり、また4層暗灰色砂質土の陥入がみられたもので、両坑とも共伴遺物は検出されず、その機能的用途は不明であった。

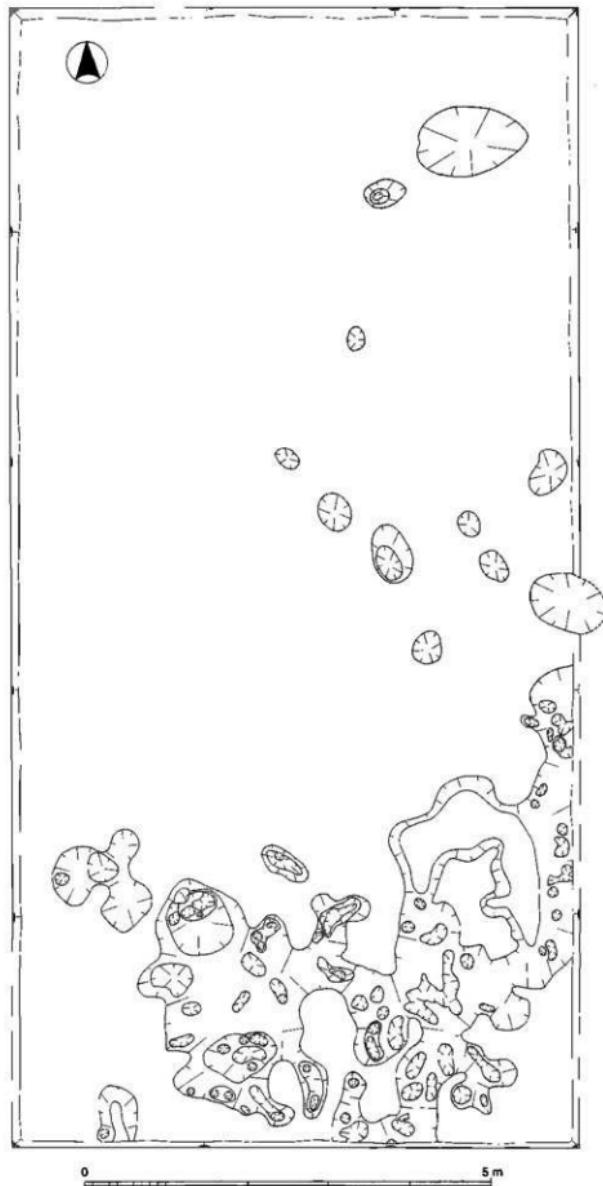
なお、全体的に本辺部には十数基の造構が確認されていて、いずれも坑壁の色調差のないもの多半であった。それゆえ明確に機能的位置付けはできなかったものであり、またそのなかのSK01（図版5-3）においては1層の暗灰色土の陥入や、陶磁器等の共伴遺物の検出から、近世期以降のものとして捉えたことを断っておきたいのである。

ピットの状況（第6・7・10・12・13図・図版5-6） ピットの計測等については第1表で示しているとおりで、一応17基が検出できた。その大半は5層中位部に表出したものであり、坑壁は貧弱なため、これらが柱穴跡であるということを断定できないものであった。

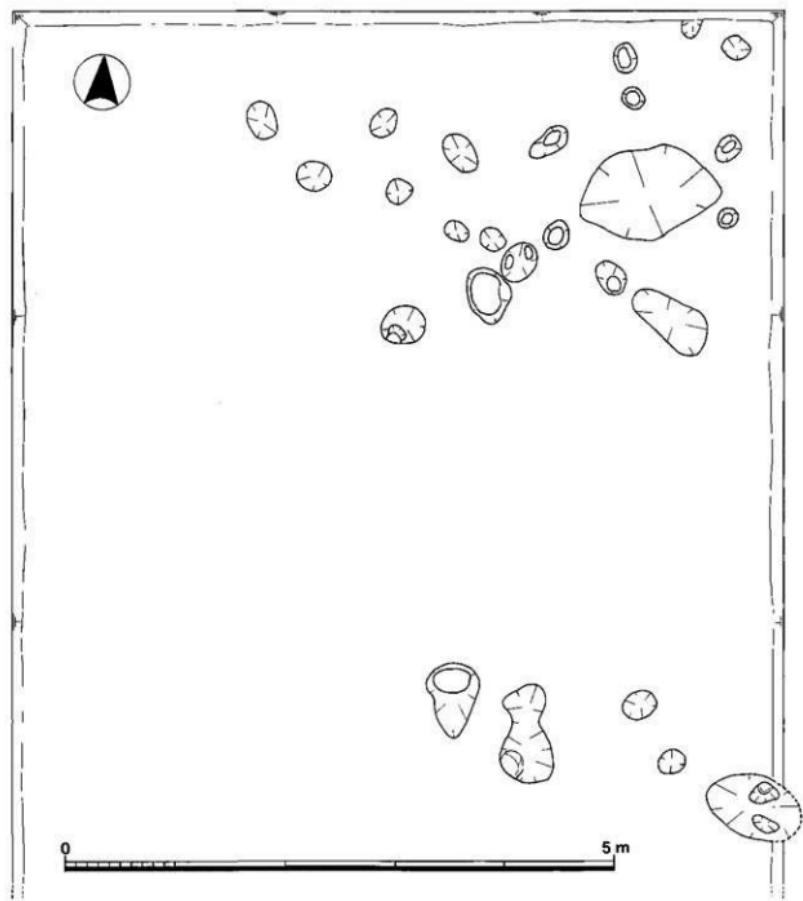
このうちのP16・17はSK12・16に隣接するもので、調査区の北辺部に表出したものである（第10図・図版5-3）。このうち前者の断面坑形は台形状で、後者はやや傾きをもった深鉢形を呈しており、両者とも4層の暗灰色砂質土の陥入が確認されたものである。しかしながらこれらを柱穴として想定しているものの、柱列形態などからみて、具体性のある構築物は浮かび上がらせるることはできなかったのである。

その他の遺構と思われるもの（第6・12図・図版3-4・5-5・6-2） 調査区の南辺側に検出されたSX01は、表出した頭初、上器・剥片等数点の遺物を伴っており、また炭化物も部分的に確認できた状況などから、本辺部が全体的に住居址等ではなかったかと思われたのであるが、掘削を進めるにつれ、その形状は不整形を呈し、また嵌入穴は枝葉状に広がってまとまりもみられなかった。このことから、一概に人為的なものとしての判別は難しく、また機能的な位置付けもできない状況であった。

図掲したe-e'・f-f'・g-g'は、SK01において任意に設定した各半截部分を示したものである（第11図・図版4-4）。その3箇所に共通しているのは、SK09と同様に大半は4層の黒灰～暗灰色砂質土の陷入が認められることや、坑底部に4・5層の混合土が捉えられるうこと、そしてブロック状に5層の黄灰～黄褐色砂質土の嵌入が認められることがある。またf-f'・g-g'においては炭化物が少量検出されたとともに、f-f'においては、やや深度のためか、6層にあたる黄褐色粘質土がブロック状に嵌入するのを確認できたもので、いずれも共伴遺物は確認できなかった。これらのこととは、攪乱的な要因による下層部の部分的な反転現象として捉えられるものであり、調査時点においては遺構かを



第12図 第4・5層層界部造構図



第13図 第5層中位部遺構図

明確に判別できない状況であったのである。おそらくは動物等のはまり込みによって腐朽化した生物痕とも想像されるし、または既存の遺構に入り込んだものとも考えられるが、具体的には判別できないものであった。

3. 結　　句

遺構の表出は、4・5層の層界部および5層の中位部に認められたものの、後世によるところの水田造成などによる深度の高い削平や、オーバーフロー等による遺構面の侵食などの要因によって、一部実測を誤認したところもあった。しかしながら、部分的には縄文期の遺物を伴うものも確認された

ことから、本遺構群は縄文時代に伴うものと捉えることができたのである。

なお、遺構からの具体的形態は明らかにできなかったのが実情であった。

(山本 浩之)

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

遺物の採り上げについては一応、原位置方式で行った。ただし、後世の人為的行為を伴ったと考えられる1層の耕作上から酸化鉄の含浸と捉えた3層までのものは、ただ層名を記して採集のみとした。したがって、原位置方式を用いたのは4層から5層内に出土したものに限って行ったことになり、なかでも5層内においては、垂直分布状況からの傾向を得るため、さらに上・中の部位とに凡そ分別して採りあげたものであった。

なお、遺構から出土した遺物については、共伴した遺物は一括した採り上げとし、原位置方式では行っていないものの、SX01およびその至近からの出土分については、大型の坑径のため、一応その原位置を押さえたものであった。

第2節 遺物の出土状況

1. 出土遺物について

遺物の種類と出土地区については第2表（遺物集計表）のとおりで、その点数は約100余りであり、隣接した遺跡から較べると少量といえるだろう。これらのうち最も多かったのは、1・2層を中心とした陶磁器類で、出土総数の8割以上を占める86点であったのである。

次いで縄文土器片の6点、石器剥片の5点と続き、縄文土器か弥生土器、あるいは上師器のいずれに属するものか判断できないもの3点、そして2点の打製石斧、チャート・金剛類の各1点ずつという順となっている。したがって、明確に近世期以降のものと判断できる陶磁器類を除いて考えれば、その遺りの大半は、縄文遺物として捉えることができるだろう。なお、他には少量であるものの、炭化物も検出されている。

第2表 出土遺物集計表

出土区	層位	打製石斧	剥片	チャート	縄文土器	萬葉・古墳・土器 か付属なもの	陶磁器類	鐵器	炭化物	計
A-a区	1~2層						19			19
	3層	1					3			4
	5層				4	1				5
A-b区	1~2層			1			15	1		17
	3層						1			1
B区	5層		1							1
	1~2層	1		1						36
	3層						34	5	少量	5
△-a bベルト							9			9
共伴遺物			3		2	2				7
計		2	5	1	6	3	86	1		104

2. 遺物の出土傾向

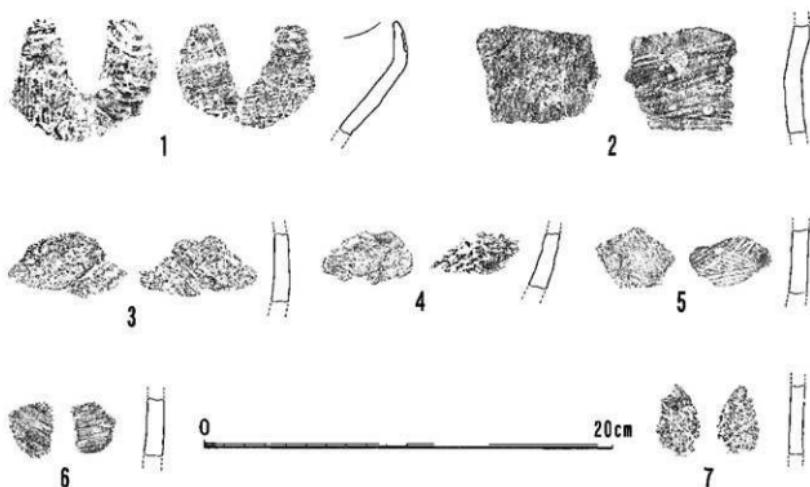
縄文土器を中心とした土器片の出土傾向からみると、その包含層は黒灰～暗灰色砂質上の4層から層灰～黄褐色砂質上の5層にかけて出土していることが判る(第2表)。さらに詳細には、B区においては4層から2点、A-a区においては4層から2点、5層の中位部からは5点という状況で、A-b区からの出土はみられず、また剥片の出土状況においてもB区の4層からA-b区の5層にかけて、各区とも僅かに検出されているという状況を呈していたのである。

これらの出土傾向と、調査区の上位にあたるB区からA-b区にかけての4層の尖滅状況から、4層の上位部における深度の高い削平の状況や、5層上位部においての水流等による浸食を想像できる。したがって、縄文文化期の構築部位は4層の中位～下位部にあったのではないかと想定してみたのである。ただし中には採り上げにおいて層位の捉え違いの可能性もあること等から、明確には言えそうもないのが実情である。

第3節 実測 遺 物

1. はじめに

出土した104点(炭化物は除く)のうちから、形態的または特徴的なものを抽出し、以下みていくことにする。なお陶磁器類においては、本遺跡の性格的な位置付けに大きな支障はないものと考え、一部を除いて紹介はしないことにした。



第14図 土器類実測図

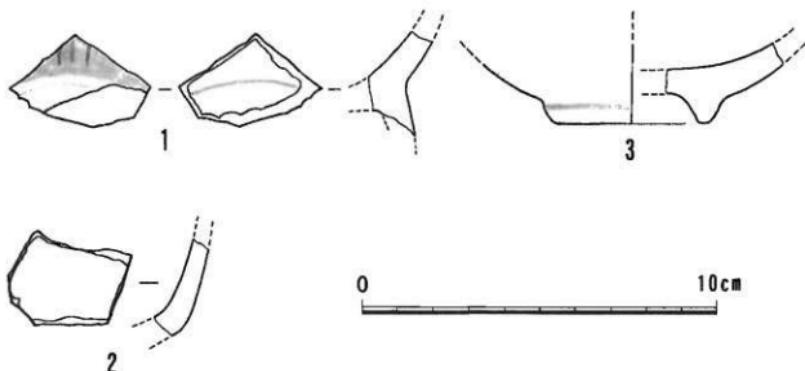
2. 実測遺物

縄文土器（第14図・図版2-1・-2・6-5） 1～3・5・7は縄文土器で、いずれもA-a区から出土したものであり、1を除くとおそらく縄文後～晩期にかけてのものと思われる。うち1は、5層中位部から出土した口唇部を損失する口縁部片で、ゆるいキャリバー型の深鉢と想定できるもの。その口縁部は内湾して、頸部がくびれる形状を呈し、一方で口縁部文様帶には、沈線により逆弧文を描き、そして文様帶以下には、縦位条痕文を施している。これらの特徴から、中期後半に位置付けられる呂木Ⅲ式と考えられるもので、匹見町内では初出となり、まとまった資料はないものである。2も中位部から出土した胴部片で、深鉢と思われるもの。内外面ともにナデによる調整で、とくに内面は二枚貝による条痕の後に施されており、炭化物が付着している。胎土は密で黄灰色を呈して、焼成は良好である。そして3は、SK04（4・5層境界部表出）から出土した共伴遺物である。全体に磨滅して判りにくいものであるが、胎土は密で暗褐色を呈し、焼成は良好であった。

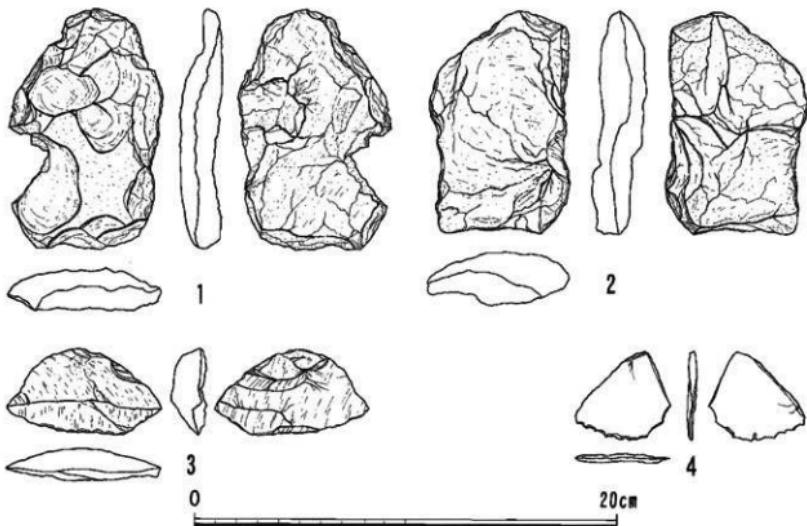
また5は、2と同様に中位部から出土した胴部片とみられ、内面には二枚貝による条痕が残っている。内外面ともにナデ調整が施され、胎土は黄灰色を呈して、1～2mm大の砂粒を少量含んだものであった。そして7は、SK05（4・5層境界部表出）から出土した共伴遺物であり、内外面ともに条痕を施した後に、ナデ調整を施したものである。胎土は、暗褐色を呈して、1～3mmの砂粒を含んだものである。

縄文・弥生土器および土器器かが不明なもの（第14図・図版2-4・6-5） 4・6は、いずれもB区のSX01から出土した共伴遺物であるが、土器形式の特定が難しかったものである。ただし前者は7に類似して、内外面ともナデ調整を施し、暗褐色の胎土を呈して砂粒を含んでいることや、また後者においては全体に磨滅するものの、胎土は黄灰色を呈して砂粒を少量含むことなどから、私見では縄文土器の可能性を窺えるとも思えるのである。

陶磁器類（第15図・図版6-5） 8～10は、いずれも1～3層までに出土した備前系の陶胎染付であり、うち8・9はA-a区、そして10はB区からの出土であった。このうち8は碗の高台部で、



第15図 陶磁器類実測図



第16図 石器類実測図

胎土の色調は灰白色で緻密なものであり、近世期以降と思われるもの。9は、外面鉄須による一条の界線を施したもので、その軸面には氷裂文がみられ、これも胎土は緻密なもので近世期以降と思われるもの。そして10は碗の高台部で、その径およそ4.0cmを測り、高台部に一条、腰部に一条の界線を施している。胎土の色調は灰色で緻密なものであり、近世期のものと考えられる。

石器類(第16図・図版6-5) 11はB区の1・2層から出土した玄武岩もしくは頁岩製と思われる打製石斧で、器長11.5cm、器幅7cm、厚さ1.8cmを測るもの。全体に風化が進み、また剥離は丁寧とはいえないものの、器形は比較的整っている。刃部の刃部はやや磨滅しており、また主要剥離面は裏面の上位部と捉えている。12はA-a区の3層から出土したもので、安山岩製の打製石斧である。その器長は10.6cm、器幅は6.3cm、厚さは2.2cmを測り、刃部にかけての部分を損失しているもので、側刃部等に二次的な加工を施している。

13はB区の1・2層から出土した剣片で、表面に打痕を捉えられるもの。刃部調整などの二次的加工はみられなかった。そして14はA-b区の5層上位部から検出されたスクレイパーと考えられるもの。その厚さは0.4cmと薄く、刃部は連続した片面調整を施されて弧状を呈している。

第4節 小結

本遺跡は、上位の層位を除いて、全体的に砂質性の層序を形成しており、それが遺構の遺存性を無くしたのだろうと思われる。そのような状況下で、5層中位部に表出した遺構の実測においては、おそらく上位からの搬入を見落としていると考えられ、その坑底部のみを記録に遺すことができた。し

かしながら少量の出土遺物の中には、当町では初出となる里木Ⅲ式（縄文中期後半）の検出も認められており、これらのこととは本調査における成果であったといえよう。

（山本 浩之）

〔参考文献〕

小林達雄 編集『縄文土器大観 第3巻 中期Ⅱ』。

矢野健一 1994 「北白川C式研行期の瀬戸内地方の土器」『古代古都』第16集

矢野健一 1995 「(7) 並木式・阿高式の編年観変更の意義」『日本考古学協会第61回総会 研究発表要旨』



1. 遺跡の遠望（北東から）



2. 遺跡の近景（北東から）



3. 発掘作業風景（B調査区）



4. 層序堆積状況（B調査区の東壁）



5. 層序堆積状況（A調査区の東壁）



6. 層序堆積状況（B調査区の南壁）

図版 2



1. 縄文土器の出土状況



2. 縄文土器の出土状況



3. 縄文土器の出土状況



4. 土器片の出土状況



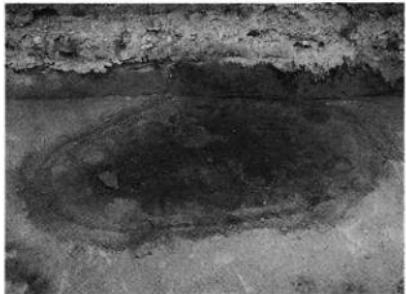
5. 剥片の出土状況



6. 炭化物の表出状況



1. P02・SK04(4・5層層界部表出)・SK05
(4・5層層界部表出)の遺構表出状況



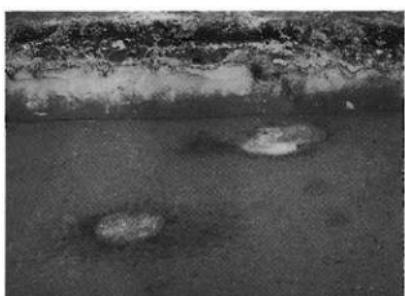
2. SK05(4・5層層界部表出)の遺構表出
状況



3. SK06(4・5層層界部表出)・SK07
(4・5層層界部表出)の遺構表出状況



4. B調査区SX01の表出状況(西から)



5. SK04(5層中位部表出)・SK05(5層中
位部表出)の遺構表出状況

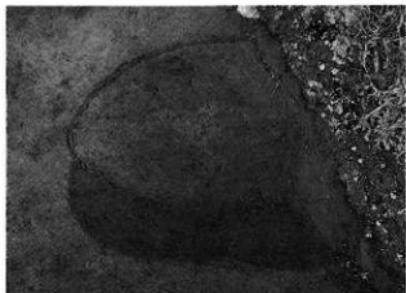


6. SK07(5層中位部表出)の遺構表出状況

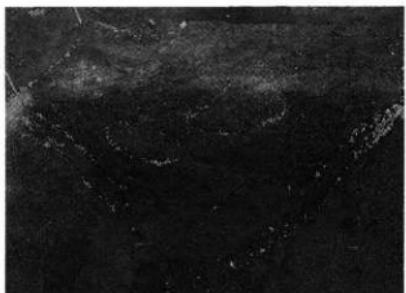
図版 4



1. SK05 (4・5層層界部表出) の半截状況



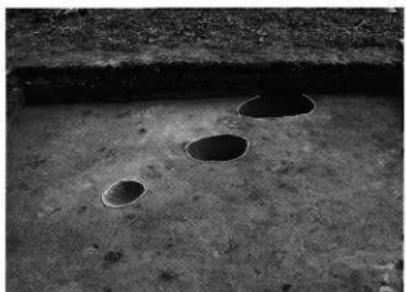
2. SK07 (4・5層層界部表出) の半截状況



3. SK09の半截状況（西から）



4. B 調査区SX01の半截状況



5. P02・SK04 (4・5層層界部表出) ・
SK05 (4・5層層界部表出) の遺構完掘
状況



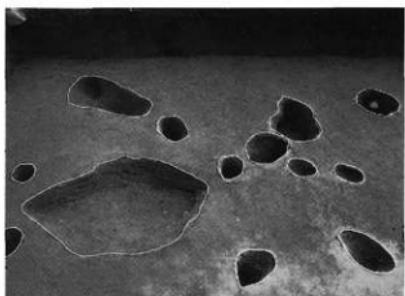
6. SK05 (4・5層層界部表出) の遺構完掘
状況



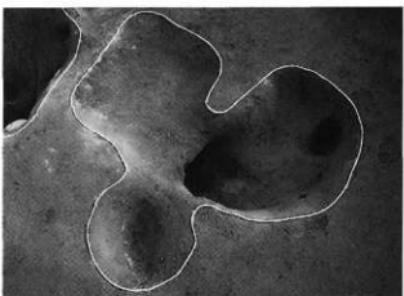
1. A-a調査区東辺域における4・5層層界部表出遺構の完掘状況



2. A-a調査区東半域における5層中位部表出遺構の完掘状況



3. A-b調査区東半域における5層中位部表出遺構の完掘状況



4. SK09の遺構完掘状況（北から）



5. B調査区SX01の完掘状況（北から）



6. A-b調査区の遺構完掘状況（西から）

図版 6



1. A-a調査区の遺構完掘状況（西から）



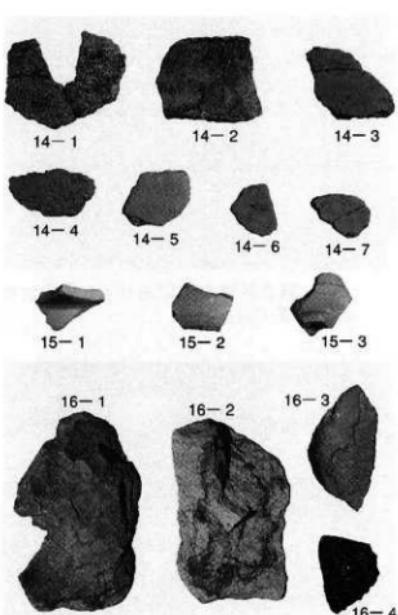
2. B調査区の遺構完掘状況（西から）



3. A-b調査区試掘坑における河床砾の表出状況



4. 北からみた調査区の完掘状況



5. 実測遺物

平成13年3月22日 印刷
平成13年3月29日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告書第35集

小田原遺跡

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見1260

印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59
